

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	英の亞弗利加經營：雜錄
Author(s)	木南生
Citation	龍南會雜誌， 7 6： 5 0 - 6 2
Issue date	1899-12-23
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5456">http://hdl.handle.net/2298/5456</a>
Right	

## 英の亞弗利加經營

木 南 生

序論……英殖民地の中堅……セシル、ロイド……中央亞弗利加縱貫鐵道……スーダン問題……フアシヨダ事件……英佛協商  
……ツランスバール問題……セームソン博士事件……英獨協商

英の亞弗利加經營の余波は、所謂ツランスバール問題を生じ、風雲洶湧、諸新聞共に之が爲に惱殺せられつゝあり、今や各國相關係する事、猶月と潮との如くなるを以て、これを暗黒大陸中の出來事とまで閑却するを得ず、余は英の亞弗利加經營を通じて、一貫せる主義の存するを見、過去を論じて現今及將來の問題を推定するの料となさんとす、篇中論ずる處多く近時の外交史中の重要な部分を占むべきものにえて、幾多の外交家を轉た反側せしめたるものなれども、余不文にして地名と人名とを除けば殆ど余字なきが如きものを作爲せるを愧づ、既に演說部に於て『南亞事件』の講あり、且つ常に新紙を閱せらるゝ諸君の前に、此の管見を公開するは、釋迦に說法の嫌なきにあらざれども、或は觀察の點を異にせんかと思ひて茲に及びしなり、材料は一八九八年政治年鑑、外交時報、亞弗利加の前途、及諸新聞雜誌により、條約公文の翻譯は、概外交時報によりしを以て誤譯なしと信ず、吐瀝の稿、或は事實に誤あらん事を恐る、唯だ謹で諸君の叱正を仰ぐのみ。

序論　亞細亞大陸は小亞細亞に至り、將に盡さんとして、強弩の余勢はこゝに尤大なる亞弗利加を起し、北より南に展開せしめ、二百萬方里の大陸を作る、アレキサンドリヤの高閣、カーセーアの文化は、霞の如く消え去りて、ハンニバルの俠魂、クレオパトラの秀姿、僅に歴史の二三頁を埋

るのみ、今や此の額散し腐爛したる一大贅疣は、歐洲諸國の割取する處となりて、悉くこれ白哲人種の跋扈に任ず、死屍の存する處は鸞鳥の集る所、亞弗利加問題を知るは歐洲列國の問題を解釋するの端緒たらんとす、これ余輩が、夙にこの暗黒大陸の内情を詳にせんと欲する所以なり。

亞弗利加に於ける列國中、其の土地の大を以てすれば佛を第一とす、三百萬平方哩、英第二にきて二百十九萬平方哩を有す、余がこゝに述べんと欲するは、英の殖民地にきて彼女は如何にして、かく膨脹せまや、如何にして他の殖民地を侵略せんとするや、如何にきてこれを經營せんとするやの諸問題にあり。

英殖民地の中堅    スタンレー曰く亞弗利加の諸殖民地中尤も有望なるは、英の殖民地なり、其の土地に於ても其位置に於ても、彼は發達の歴史を綴り得るものと云ふべきなりと、實に然りデラエラ灣を除くの外、長港灣と稱え得可きものは、皆英領にして四大河中、英領中を流れざるものの一のコンゴのみ、水湖の如きチャット湖を除くの外大なるものと稱せらるゝものは、皆英領か又は、一部を英領に接せざるはあらざるなり、水は物産を生み、交通を利し、人口を増殖せしむ、文化の起るは實に水邊よりするものとせば、英は尤も好位置を占めたるものと云ふ可きなり、然れども西岸一帯の殖民地より、寧ろ英か着目する所は、中央亞弗利加を南より北に連結せんとする殖民地の一帯なり、英の殖民地の中堅と稱せらるゝものはケープロコニイにきて、千八百六年これを闢人より奪ひ、全力を盡して經營え、絶へず北進を保ちつゝ終にオレンヂ河を越え、マターヘルランドに至り今や廣袤二十七萬五千平方哩に達しぬ、千八百八十七年ナタルの英領に歸するや、ナタルよりケープロコニイの、建設せられてより未だ一世紀に滿たざれども、その人口は百八十萬となり、鐵道

三千餘哩に達せ、其主要物産の英國に輸出せられざるの實に左の如き數を示すに至りぬ。

金剛石 四百五十万弗

羊毛 二百三十三万弗

山羊毛 四十九万弗

獸鳥羽 四十九万弗

銅 三十万弗

計 千七百萬弗(千八百九十六年調査)

斯の如くに發達えて今は自治の民政を施し、殆ど第二の英國たるの觀をなせり、これ英が南に於ける擴張の基礎にして、これより北に終始擴張せつゝあり、英が北進えて、ロイデシヤを得たるは、實にセシルロードの賜なり、ロードなくんば南亞の今日なく、極言すれば殆ど凡ての亞弗利加問題あるなし、余は今之を説かざるべからず。

セシル、ロード ロードは英國の人、始め肺を病む、南亞一帶のテールブルマウンテンの大氣は、非常に濃厚にして健康に適するを聞き、これを養はんが爲めに亞弗利加に來りてなり、手を延ばせばヨハチスブルクあり、キムバレイあり、草莽の下無盡の富源を藏し、一舉手一投足、直に天下の耳目を聳動せしむ可きを知るや、彼は千八百八十九年(或は九十年と云ふ)フリチツン、サウス、アフリカンコムパニーを建てベチエナランドよりサムベチの流に至る間に進入せ、勢力を植てん事を計畫せ、遂に政府の特許を得て二百萬の資金を集め、千八百九十年六月、二百の歐洲人と百五十の勞働者と五百の騎馬巡查を率て北進し、四百哩を進んで、その歳の八月ヤムベチ河の南マシヨナラン

ドに至り、こゝを根據として金鑛を探り、草莽を開き大に富源を求めたりき、蓋し同會社は利益の獲取と土地の侵略を以て目的とするものにして、東印度會社の亞流なり。ロードは即ちクライブ・スケングの事を行わんと欲するものなり。

ステット曰く亞弗利加に於ける土地の擴張は、殉教育の基を階梯として、漸次に擴張せられたり、若し我が勢力の及ぶ所、テーブルマウンテンよりサムベチに到る迄は宗教家の足跡を除去せりと假定せよ、然らば我殖民地は全く空虚ならんと、實に然りされどもセシルロードにして進入せ、勢力を植ゑ、施政を始むる事なくんば如何、神は英國にのみ左袒し給はで此の廣漠なるロードヂヤも或は獨逸の食食する處となるか、然らずんばホール人の版圖となんのみ、ロードは蠻人の版圖を侵略し、數年ならずして七十五萬方哩の土壤を會社の版圖となせ、外にハーレー、ジョンストンを派して東北にアザランドを治めしめ、獨逸の東部亞弗利加を侵略せんと試みつゝあり、かくして會社の配當は原額の四五倍となり、その勢侵々として旭日の如くなりき、彼は千八百九十年より千八百九十五年迄ケプロニーの首相を兼ね其政治上の勢力を利用して益々北進せり。

万人を以て黄金若くは金剛石より、尺寸だも貴きとせざるハーネー、バーナトは曾てロードと金剛石開掘を共にし人に語て曰く、天下廣きと雖も未だ余を説得て水銀採金法を行はせ得るものもある事なかりき、然れどもロード氏は名狀すへからざる威力を有し、余を翻弄して掌中の珠玉の如くならせめたり、余は多年該採金法に抗抵せしと雖も、一度氏の勸諭を聴くや我を忘れて協賛せりと、以て彼の人を服するの術あるを見る可からず哉。グラッドストン死去てより、眞個に帝政及自治の正鵠なる意義を悟得せるは、南亞の天地に默想せるセシルロードの外あらざる可し、彼は英人

中の英人なり、即ち英人の完全なる標本なり、換言すれば彼の思想は民政的基礎に帝政的志想を交へんとするにあり、然れどもその根據の米國的なるは、愛蘭自治問題の亂麻の如くなりて時、人民は何か故に米國憲法を讀まざるかと嘆せざるを以ても知るを得可し、要するに、彼は平和、正義、自由の三大主義を合せ行はんとするものにて、その亞弗利加に於ける抱負は、彼の揚言する處によりて明かなり、曰く

『假令人は南亞の地を人爲的に分つとも自然力は然か分たるゝを欲せざるべし、何となればケープタウンに於ても、タルバンに於ても、ローデシアに於ても自然の興味は皆同一にて、國民は同じく言語は異なるなく、血族習慣は彼等を自然に連繫せしめ、距るべからざるを欲せばなり』と南亞のデーブルマウンテンより、北方ウイクトリア湖に至る迄、統一せらる可き運命を有するは彼の自信する所、且つ彼の飽迄成效せんとする所なり、千八百九十三年一月彼はケープタウンに於て演説えて曰く

諸君、若し輕學奏功せし事を願はば、余は薦むるにサーバーフル、フリーアの箴を以てせむ、其の辭に曰く『何事をも速くする事勿れ、歩一歩人民總体の感情と共に進退せざる可からず』と又記す余の幼なる時、老翁の櫟樹を植うるを見、馬鹿らき事と思ひ、其意を問ひしに答て曰く、余は此の樹蔭に憩ふ能はざる可し、余が余年の間には三竿の高さにも達せざるべし、されど亭々として半空を摩する日なきを知らんや、と語猶耳にあり。

吾人の事業亦實に是に外ならず、安んぞ知らむ吾人一生の事業は、遂に千百載の丕基を樹立するものたるを。

ど、彼の主張以て見るべし、評論の評論記者、彼を稱賛して曰く、黄金よりも金剛石よりも貴重なるは、黄金及金剛石の主人なり、亞弗利加はこれセルロード氏の楚柱によりて立つ、と實に然り。フアシヨダ事件如何、ツランスバール問題如何、セルロードを知るは、凡ての亞弗利加問題を解説する所以なりと知らずや。

中央亞弗利加縱貫鐵道 千八百六十年代、英國々會の亞弗利加視察委員は、議會に報告して曰く亞弗利加殖民地は、一つも發達すべき望を有せずと、蓋し四十年前は英國の眼中亞弗利加なかりしなり、然るを政府の保護なく、國民の後援なく、アングロサクソンの健兒は、侵々として内地に進入し、幾年ならずして英國内閣は一日も亞弗利加問題を閑却する能はざるに至りぬ。

ロード氏謂へらく、『南亞より中亞を合せて一丸となし、一大強國を建設せんとする第一着として、カイロよりケープタウンに至る、中央亞弗利加縱貫鐵道敷設を計畫せり、埃及、スーダンよりバアル、エル、ガザル Bahr of Ghazal を經ウイクトリアニヤンザ Victoria Nyauza の西方を貫通してロイデシアに入り、ケープタウンに至り、暗黒なる大陸に文明の空氣を輸入し、無盡の富源を開拓し、未開の領土を割取し、中央南北相呼應して亞弗利加に於ける英の霸業始めて成り、ダイヤモンド井ルドの光は世界に赫々とえて伯林のウヰルヘルムを眩え、エリゼーの大統領をえて顔色なからしむべし。況んや氣息喘々たるキイダイブをや』と此思想は南亞の天に入りしや否や、セルロードの胸中に浮びたるものにして、彼は此主張を貰かんとするには如何なる手段を取るも辭せざりき、されど世人は之を以て座上の空論とし、キリマンジャロの雪は消ゆるども、此計畫は行はる可きものにあらすとなせり、されど幸にして英國活眼の士は、ロード氏の議を賛え衆議の如何なるに

を關せず、これを推行せんとするの形勢となりぬ、よしや印度の食庫を保護する必要上よりとは云へ、スーダン征討は、其大部分は此の縱貫鐵道に起因せたりと云はざるべからず。

スータン問題　埃及は英の保護國たる事は未だ公然各國の承認を経ず、國際法上より論すれば、幾分薄弱なるを免れずと雖ども、その政令が埃及駐在官ロードクロマルに出づるは非定す可からざる事なりとす、さればその運命は元より、豫知するに難からざるなり、英は尙タリランが曰ひし如く、『入りて所より出でざるもの』なり、さればカザリン女帝がクリミヤ半島合併の當時、宣言せる所は移れて以て英が埃及合併の托辭となすを得べし、曰く『これ國內の平和慶福を維持せよ、盡力に對する正當の報酬のみ』と。然り而して英は埃及占領後、そが失ひたるスータン地方即ちマホマツト、アーメツト（偽聖マアゼ）の占有せるデルグ非シユ王國を破滅し、ナイル河上の要點たるカルツームを占領えて、中央鐵道敷設の準備をなさんとぞ、多年焦心したりしが、埃及駐在將官ハールド、キツチネルの征討は着々その効を奏して、昨年九月五日、カーツームを陥落せしめカリフを追ひ、終にスータンに於ける英の主權を確定せり、一千八百九十九年一月十九日カイロ府に於て、ロードクロマルと埃及外務大臣グートロガリとの間に訂結せられたる、英埃條約は此のスータン征服地に就て、統治上の原則を定めたる條約にして、頗る重要なものなれば纂を厭はず之を記載す。

埃及國主の政府に向て叛旗を翻したるスータンの諸州は今や英埃政府の軍事上及財政上の協力に依り征服せられたるに依り、

而て以上の諸州の大部分の未開にして不定なる狀態及種々の地方の特異の要求を應分に顧慮を



て、其の行政及立法の制度を決定する事必要と成りたるに依り、

英國政府は上議の制度及法制に關する現在の處分並に將來の企畫經營に與るべき事に付、戰勝の權利に依りて得たる要求に効果を與へんと欲するに依り、

而してワディー、ハルファ *Mady Halla* 及びスフキン *Sakin* は幾多の點よりして其隣境たる被征服諸州と一括して十分有効に行政するを策の最も宜きと爲たるものと考へらるゝに依り、

下名の兩全權委員は茲に左の各項を協定公布するものなり。

此の條約にてスータンと稱するは、南緯二十二度以南一帶の地を指すものにして、千八百八十二年以來曾て埃及軍の撤せられたる事なりし地、即ち曩日スータンに於ける叛亂以前はキーダイブ殿下の政府の支配に屬したるものにして、一時は埃及の失ふ所たりしが、遂に女皇陛下の政府と埃及國の政府との協力に依り恢復せられたるもの、又は將來に於て前顯兩政府の協力に依り恢復せらるべきの地たり、

スータンを通じて海陸共に英埃兩國の國權を併用す可也、但し『スフキン』府に限り單に埃及國權のみを用うべきものなり、

スータンに於ける文武統領の權はスータン總督なる一人の官吏に委すべし、此の總督の任免は英國政府の同意を経て『キーダイブ』の命令する所たるべき、

スータンに善良政治を行ひ並に其の域内に於ける各種財産の整理、維持、處分及び相續を確實にする法律命令其の他の規則は常に總督の布告を以て設定變更若くは廢止せらるべきものなり此等の法律、命令、及規則は蘇丹の全部若くは其指定の一部分に施行するを得べく、而して明示又は

必然の默示に依りて現行の法令規則を變更廢止し得るものなり、此等の布告は總べて直ちに『カイロ』駐在の英國事務官及『キイダイブ』の内閣議長に通告すべきものなり、

將來設定之又は發布すべき一切の埃及の法律、命令、閣令若しくは其の他の規則はスータン又は其の如何なる部分にも行はれざるものとす、但し前款の規定に従ひ總督の布告に依りて施行せらるゝものは此の限に在らず、中略

豫め英國政府の同意を経ることなくして一切領事副領事又は領事々務官をスータンに關して派遣せしめ若しくはスータンに居住せしめざるべし』下略

ワザイ、ハルファ及びブスワキンを征服地と同一範圍に置きたるは尤も注目すべき處とす、此の二地は征服前純粹の埃領にして（尤も英の盡力によりその主權を保持し得たりとは云へ）これを二國の共同主權の下に置きたるは、最早埃及政府の所有にあらざる事を忘る可からず、蓋ススワキンは紅海沿岸に於ける唯一の良港に於てスータンの咽喉たる位置に立ち、カーツームの死命を制し得可き位置にあり、即ち紅海々上の主權を制し得ると同時に、スータン貿易を左右し得る位置なるを以て英はこれに依てスータンを、英化するの基礎とし且つアレキサンドリアよりの鐵道を、こゝに延長して有事の日、スエズ運河に依らずして、印度との交通を安全に繼續せんとするものなり、而してスータン總督任命の權は、一は英國政府の手にあると同じければ、スータンは寧ろ英領と思考するの捷徑なるを信するなり。

斯の如くに於て英は既に、上埃及の死命を制したるが、ファシヨタ事件の結局と共に、ナイル河畔、他國の窺竄を許さざるに至りぬ、今勢ひ此にファシヨタ事件を説明せざれば、以てナイル上流の形

勢を明にするを得ざるなり。

フアショダ事件 既に前述せし如く、セシルロード氏の中央鐵道敷設が、英國の輿論となるや、千八百九十四年ロースベリー卿の内閣は、白耳義駐劄大使ブランケットに對ち、訓令する處ありしが、同年五月十二日全公使はコンゴ國の國務卿フォン、エードクエルデと條約訂結せり、その要旨は、ナイルの上流ラドー Lado 附近の土地即ちウガンダ Uganda、及びアルベルト湖 Albert Nyanza の北に横ふ地をコンゴ國に貸渡さ、其報償とてニアサランド Nyassa Land、及びタンガニカ湖 Tanganyika トウガンダを接續する土地を得、一舉て中央鐵道を貫通する土地を得んとせり、蓋しタンガニカ湖附近は獨逸の東部亞弗利加と、コンゴ國との相接する地に在り、一の空地なきを以て、かくの如くせざれば南北結合の大抱負は、一場の夢と消ゆべければなり、されど此は佛蘭西の政府の頭上に、一大打撃を加ゆるものなり、何となればフレンチコンゴよりバールエルガザル及びラドーを経て、印度洋海岸の佛領地オボック Obvok (バベエルマンデブ Bab-el-mandeb 海峽の咽喉に在り、英のアデンと對する要港にして紅海の關門なり) に東西横貫鐵道を敷設さ、英の南北連合を絶斷し、中央亞弗利加に廣大なる版圖を作らんとする佛蘭西人の冀望を水泡に歸せしむるものなればなり、佛の亞弗利加政策を以て支離滅裂に、終らしむるものなれば、全年六月佛の議會の議論沸騰せしを以て佛蘭西政府は、直に此の條約に向て抗議を申込めり、仍ち「英國に於て白耳義の領土たるを公認する權利なきのみならず、白耳義はコンゴ國開設條約及佛蘭西と締結したる國境條約により、北緯四度以北に、國境を廣むる能はず」と言ふにありき……ラドーは北緯五度の線上にあり……之に於て此の條約は無効に屬せり、故を以てセシルロードの意見は殆んど實行し得

へからざるの觀を呈せぬ、佛蘭西政府は此の條約により、醒覺せられ千八百九十六年の秋マルシャン少佐 Commandant Marchand 及びオタール Liolord の率める一隊をナイル上流に向て派遣せり、マルシャン少佐は佛領コンゴより、バールエルガサル附近に至りし(同九十七年の秋)がその後の消息は、杳とえて知るべからざりき、九十八年九月キツチネル將軍が、カーソームを陥れホワイトナイルを溯りしが、ファシヨダ Fashoda (北緯十度東緯三十度二十分に位せ、ホワイトナイルの西岸にあり)に於ても、マルシャン探險隊が佛旗を建て占領せしむるに逢ふり。

是に於て英佛の衝突起り、一時歐洲の天地に風雲を洶湧せしめんとせり、即ち英は以前より埃及王の配下に属せし地にして、一時カリフワの爲めに占領せられし地方を以て、佛の有すべき地にあらざと云ひ、佛は飽迄マルシャン隊先占の事實を以て、佛の所有となさんとせり。

十月九日に英國内閣が議院に發表せし、ブルーブック埃及關係第二冊は、頗る此間の事情を説明せり、即ち八月二日ソールスベリー侯よりクロマルに與へたる訓令中に曰く

《上略》ナイルを上進する時に於て、若し佛蘭西又はアビシニヤの官吏と遭遇する事あらば、之と應對する上に於て如何なる形式に於ても、女皇陛下の政府が佛蘭西又はアビシニヤのナイル沿岸に對する占取權を承認したる言動を爲さざるに注意すべし、佛蘭西に對してはサーエドマンドモンソン(英の駐佛大使)より、千八百九十七年十二月十日付を以てアフトー氏(當時の佛の外務大臣)に送りたる通牒の左の一段を以て此の件に關する女皇陛下の政府の意見を明言するものと心得らるべし。

サー、エドマンド、モンソン曰『女皇陛下の政府は大丕烈顛以外の歐洲邦國に於てナイル沿岸地方の一部分を占領するの權利ある事を承認するものと理會せられざるを要す、大丕烈顛國政府の此

事件に係る見解は、數年前ロイズベリ公の執政の時に當りサル、エドワルド、クレイが國會に  
明言し其の當時に正式に佛國政府に通知したる所の如き、女皇陛下の政府は此の時前任者の用ゐ  
たる語を全然承述して之を改むる事なき」と

クレイが國會に明言せし宣言は、千八百九十五年三月十八日下院議場に於て、「ナイル上流の沿岸  
は盡く英國の權力範圍内にありて何人もこれを争ふ事を得ず」と云ひてを指す、即ち英は飽迄そ  
の宣言を有効ならしむべき手段を取るべき決心なりとなり、全九月九日ソールスベリが、モンソン  
大使に下せる訓令に於て、一層適切に之を説明して曰く「一切カリファに属したる領土は征服の權  
利により英國及埃及政府の所領に移りたるものなれば、女皇陛下の政府は此の權利か疑義を容るゝ  
の余地あるを信せず」と、時の佛國外務大臣デルカッセは英の此抗議に答て曰く「佛は未だ曾てナ  
イル上流地方に於ける英の權力範圍を公認せず、且つアフトーは上院に於て公然之を非議したり、  
然れども實際に於てはマルシャン遠征隊なるものなし、千八百九十二年及九十三年に於て、ソオタ  
ール氏は委員とて、亞弗利加の東北部に於ける佛國の利益を確保すべき訓令を以て、ウバンキ上  
流に差遣せられたり、時にマルシャン氏はリオタール氏の部下たるべきを命ぜられ、總ての命令を  
リオタール氏に承けたりしなり、且つハイル、エルガザルの、全地域は、久しき以前より埃及權力の  
及ばざる所なりと事疑なし」と、(九月十八日巴里發)モンソン大使よりツォールスベリに報告せる  
もの、此の宣言は、計らずもマルシャン少佐がキチナル將軍に向て宣言せる「余は本國政府より  
ハイル、エル、ガザルをバイル、エル、ゼベル Bahr el Jebel の合流點に至る迄占領し、並にツォイトハ  
ナイルの左岸に於けるシルツク Shiluk 地方をアシモダ迄占領すべき訓令を帶びて、七月十日

「アシヨダに到着せたり」と、衝突せ、佛人をして稍沮喪せしめたりしが、更にキツチル將軍の報告中「マルシヤン氏は彈藥及給與を欠き居れり、彼は内地の聯絡を斷たれ、水の供給も不完全に於て、且つ此地方に於て一の服従する部族を有せず、故に若し吾人のカリファを撲滅する事猶ほ一週間遅かりしならんには、遠征隊の全滅は期し得べかりまなり」と、ありま事、事實なりを以て佛國は終に最終の決意を以ても、英國に反抗すると云ふ氣焰を失ひ新聞は一般に沈靜の口氣を取り、終にマルシヤン氏は、フアシヨダを退きナイルを下りて、佛國に阪れり。

(未完)

## 菊花

錦山人

秋の野もせに、草花いとさわなり。人は稱えて『千草の花』といふ。あるは、女郎花のなまめかまき、あるは、花桔梗の清らかなる、さては、萩、藤袴、輪藤、花菜まで、いづれか其趣のまざる。さればこそ、誰やらの歌にも、

數くも惜ま、卷くも惜ましきを。秋草の、花のむしろは、野べながら見ひ。

とあるなれ。此捨てがたき多くの草花の中にて、吾は最も菊花を愛す。

抑も、草本類の花、特に秋のもろゝの花には、自<sup>レ</sup>と沈靜の思ひこもれるが通例なり。是れ、蓋し、天地自然の氣のまからしむるものにて、また秋の花と、春の花との異なるどころならむか。わが菊花にも、亦この傾向あり。たゞ菊花には、この傾向と共に、別に、決まて他の摸倣すべから